

花の中

辛三句集



第三句集

始めに。

美しい自然を表す言葉として花鳥風月という言葉が昔からありますが、五、七、五の十七文字の中に季語と言う言葉で、自然の変化を入れ、それに対して読者の豊かな想像性を換気する俳句。古来より伝わった日本語の最たる文学の一つであると思えます。

作者の年齢に関係なく、感受性をありのままに表現する、そこに又良さがある様に思います。

一つの現象の中に小学生は小学生なりに、中年者や高年者

はそれなりに送って来た人生の中に、生き方を俳句はそれを忠実に表す文学の一つであろうと思います。

この日本の良き文化を形象する俳句を表す文集を出せる幸せを甘受し、尚続けられる事を願っております。

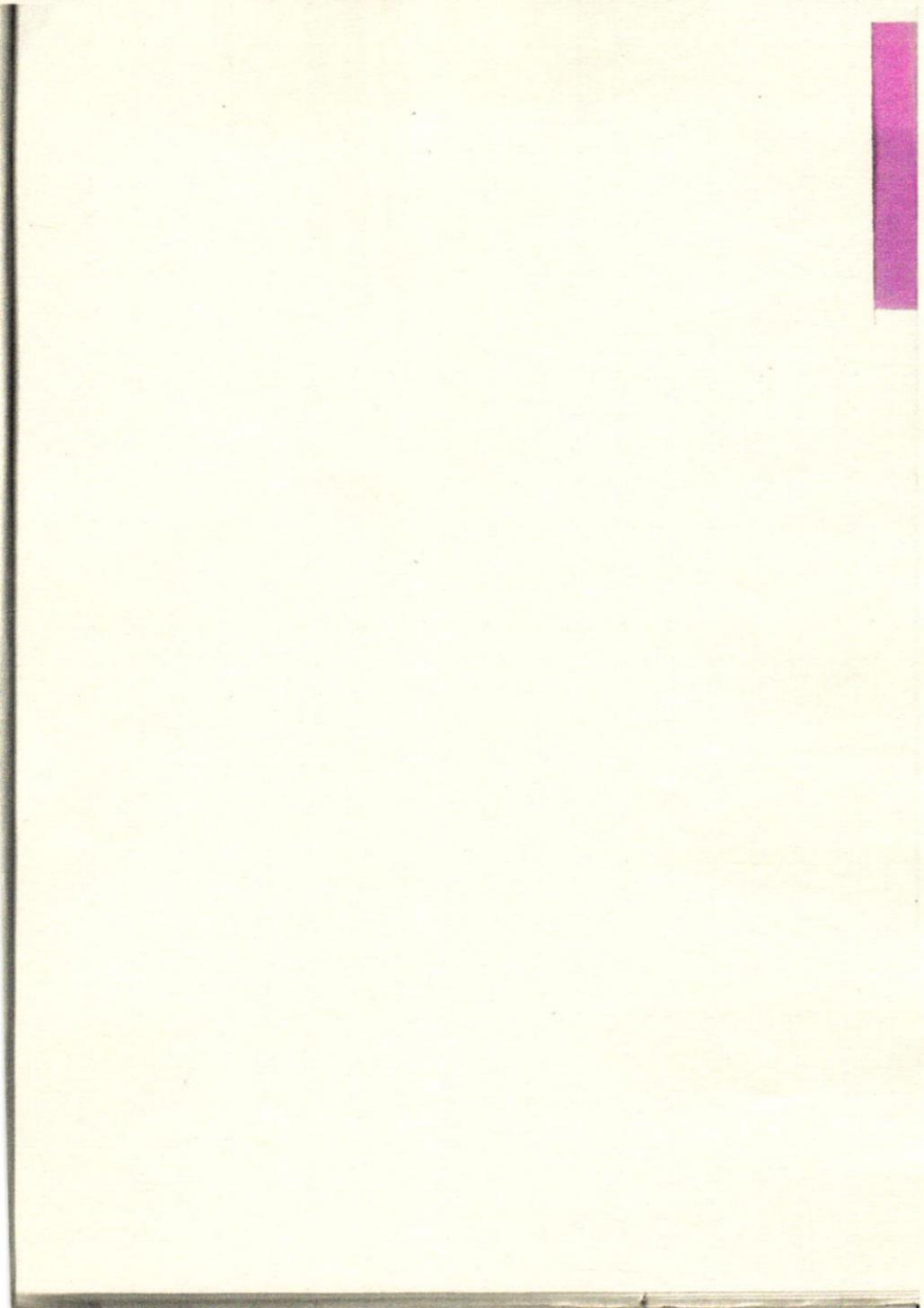
八十歳の時の朝日俳壇入選句

「初日の出八十路の坂を登りけり」がありますが、健康で良い旅を一句でも二句でも作句出来る事が、脳の活性化に役立つものと思つて感謝しております。

平成二十七年五月吉日 静岡県富士市鈴川中町二十一の六

城所 愛子





千の枝―だるる花の鼓動かな

枝先に光集めて冬至梅

春朧さんしん三線響くコンサート

茶摘み唄聞こえて来るや畑千里

大富士の見ゆる窓辺のチユリーリップ

チユリーリップ一万本の花に座す

機上より富士をとらえー春の旅

花満らて綿菓子のごとと雲の湧く

薔薇香るアロマセラピーホテルの夜

ヨガ瞑想終えし空に春の月

大輪の笑みのこぼれる白牡丹

花の中卒寿の夫に歩を合わす

全山が競いそれぞれ春を編む

壽ぎの叔母百歳に涙む新茶

満天星どうしんの千の鈴振る食事会

昼顔の風と掴みて群れ遊ぶ

まほろばの桃花千疊風やさー

ふたたびはめぐり来ぬ日よ月朧

春うららゆがふ館より安里節あさとび

手作りの婆のもてなすアランダギー

流れ行く雲を映して田植之水

どこ迄も越後平野や早苗風

凜として富士をせびらにかぐや蕃薇

一^{りぢり}ハヤぶぶつと伸びて背いくらべ

薔薇園の一期一会やブルームーン

ものの芽のこぞりて立つや春の風

花一瞬会えてよかった山法師

山ざくら恐れをなして踏む一步

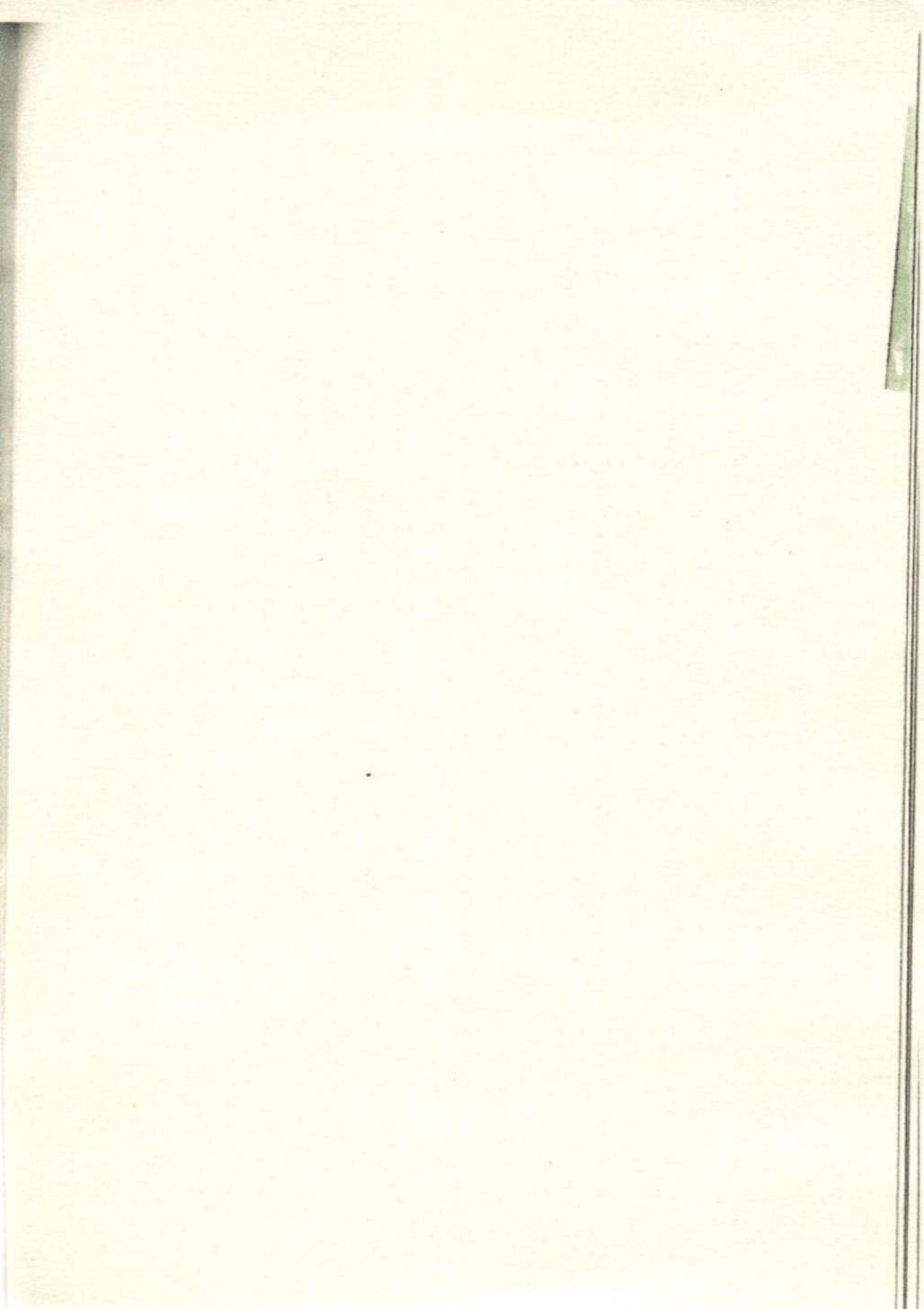
白木蓮ひと日ひと日の命かな

菜園に陽炎もゆるよき日和

つるゝ雛かぐやの里に憩いけり

惜ゝみても還らぬ月日春は行く





山の灯や連なり登る夏の富士

山小屋に異国話溢る夏の富士

音立てて芍薬の花開きけり

視界なき雨の二念日夏寒一

川音に目覚め涼き梅ヶ島

田園の蛙のシンフォニー聞く夕べ

神城の夏落ら葉掃くみな無口

台風過土産ゆべりに香鼓み

燃え上がる霧島つつどに染まりけり

浴衣ゆかりの娘袖まくら上げキヤチポール

水無月や天には水の無かりしか

ふり向けば友の面影遠花火

玉蜀黍ハ一モ二カ食いする夫卒壽

リラ冷えや花咲く釧路遠くなり

赤トシボめがけて飛ぶや逆さ富士

糠浸けの味の深さや茄子の色

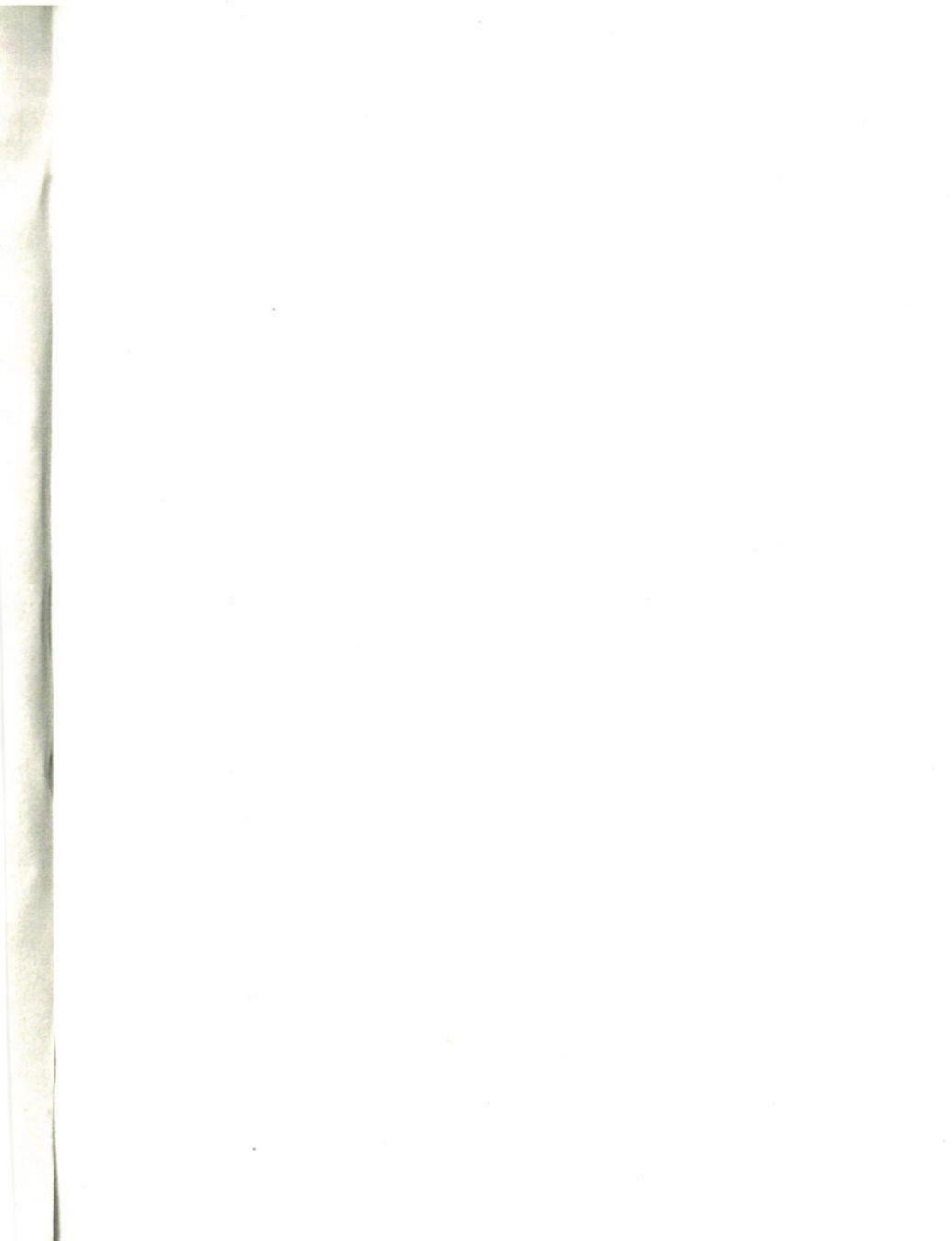
峰路やかなかなの声欲ーいまま

ああ上野紅蓮に座ー花の中

白球の宙を描きー雲の峰

冷奴皿まで冷やーおもてなー





チエンミンの胡弓の音色^ひ渡る秋

写経する心^和みじ菊日和

西空に淡き月あり式部の実

足るを知りたおやかに生く敬老日

チビ丸の眠るがごとく秋彼岸

女郎おみね花揺らす風あり友の逝く

一族の揃いたるごとと彼岸花

すすき野に風の一吹き波渡る

コスモスの風の囁き富士晴るる

新米の白き眩しき氣を貰う

墓参後の麻布十番走り蕎麦

鷹の爪色を極めて燃ゆる赤

世阿弥忌や秘すれば花の道導べ

向仲間とめぐり遭いたし秋の月

十五夜のすずな会席なつかしき

胃ろうとは終末医療よそぞろ寒む

朝顔の白にときめく風やさー

漁火のホテルの窓や秋惜ーむ

バツハ聴く風の囁き疾秋はやに

八十路過ぎ

師との出会いや文化の日

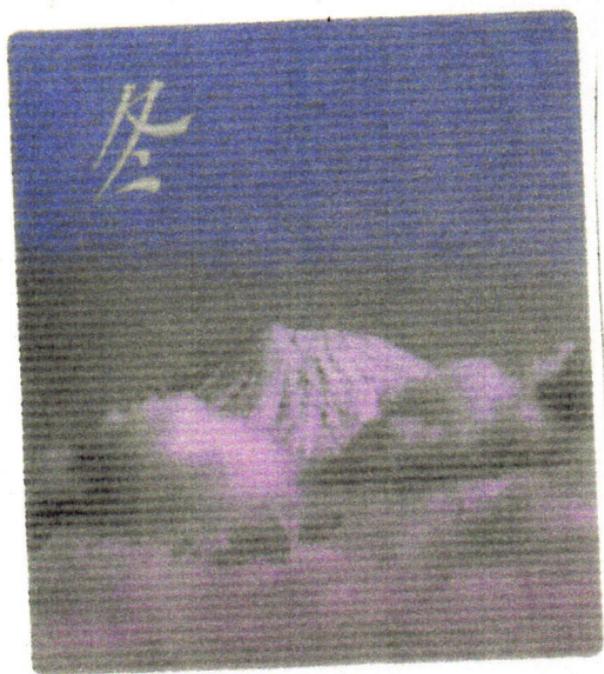
ノルジックボール

夢は紅葉のいろは坂

すすき原背を丸くして待つ月夜

舞う紅葉時よ止まれと叫喚す

首塚の山里深く柿実る





富士晴れてそぞろ歩きや野紺菊

窓越の冬満月やホテル窓

雪富士を照らす満月高くあり

仰ぎ見る雪富士大きくまのあたり

「時の栖にて」

銀嶺の天城連山冬夕焼け

凜とーて米壽の梅の香りけり

庭先に笑顔ふりまく黄水仙

天辺のたるま呑み込むどんどの火

賛美歌の響く聖堂梅香る

見舞うよりそつと祈つて春を待つ

風に耐え光捕らえー実南天

歌姫のホール漲みほる早春賦

鬼子鼓座天まで届け二月尽
おんてござ

梅三分東京マラソン競走

冬日浴び真紅の富士の鮮やかに

如月きさらぎの花嫁に詠む 愛の詩うた

サンライズセット

冬の使者早訪れー風蓮湖

大寒をめぐげずに歩く犬を友

寒に耐え

クリスマスローズ華やげり

枇杷咲くや

身を寄せ合いて小さき白

お題

静ナ

初日の出光の道は波靜か

嶺峰不二に世界平和を

平賀三十五平友

詠追歌

城所愛子



お題

本

幼き日母を聞きし童話集

孫にせがふふたは読みの

昭和二十六年夏

愛子

詠進歌